

21 世紀への文化・文明論 『文明の衝突』から考察する未来  
The Discourse for the Future Civilization

毛利 雅子  
MOURI Masako

*The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* by Professor Huntington of Harvard University explores discussions on religion and civilization throughout the world. This paper also addresses possibilities of the harmonization of culture and civilization from the view point of Japanese, a society which has customarily integrated select aspects of various foreign cultures. The paper further discusses the dialog ongoing in Japan as to the future leadership role it should adopt in the harmonization of the developing global society.

2000年、アメリカ・ハーバード大学のサミュエル・ハンチントン教授が『文明の衝突』を発刊、大きな衝撃とともに日本にも翻訳が登場した。筆者は同教授が来日した折にわずかな時間ではあるが通訳者として同行、著書を通してだけでなく教授本人の言動を間近に見る機会に恵まれた。教授の著書、お人柄に触れた上で改めて 21 世紀への文明論を考察したい。

人間は皆異なっている。異なっていることが当たり前で、誰もが同じはずはないし、同じであったとすれば、こんなに薄気味悪い恐ろしいことはない。人間はロボットでもないし、クローンでもないからだ。更に、同じであるように統制されていたとしたら、これもまた非常に恐ろしいことであろう。現在の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）のように完全な言論・思想統制が引かれ、誰もと同じように笑い、同じように考える（そのように強制されている）のも、生きている生身の人間としてはおかしな話で、まさにジョージ・オーウェルが描いた『1984年』のような世界になってしまう。しかし異なっているからこそ、その差ゆえにいざこざも起りえるし、それが肥大化すれば個人間の衝突から更には国

際紛争にまで発展することもある。現に今、こうしている間にも、世界のどこかで衝突があり、紛争が勃発し、誰かが命を落としているのである。

しかし、ここで少し立ち止まって考慮しなければならないのは、もし人間が自分だけの価値観に基づき、自分だけの幸福、自分だけの満足感のために生きていく・存在していくとしたら、世界はどうなってしまうのであろうか、ということである。誰もが自己満足、自己達成、自己の幸福感のためだけに生きていこうとすれば、当然それはエゴの対立、衝突となり、現実にも今世界で起きているような衝突や紛争が日々の生活でも絶えないだろう。個人間での衝突と世界での衝突や紛争は関係ないように見えるかもしれないが、結局は根源を辿っていくとエゴの衝突という同じ根を持っていることが、見え隠れする時があるはずである。これに気づくことが出来れば、それは次の時代への、そして平和や共存への第一歩と考えてよいだろう。しかし、この初めの一步に気づくことこそが、実は非常に難しいことなのである。

人間はついつい目先の利益や、自分の立場を考えて行動してしまうところがある。それは致し方ない時もあるだろう。が、それこそが大きな衝突を生む最初の小さな原因だということに気づかなければ、結局はいつまでたっても同じ過ちを繰り返すこととなる。物質的なことばかりに目がいて、精神的なところまで思いやる余裕がないといったほうがいいかもしれない。特に現代のようにせわしく時間に追われる生活だったり、またエゴの衝突の中で自分の身を守ることで精一杯だったりすれば、自分の内なる存在、自分の内なる声、また精神的な部分まで思いを馳せることは非常に困難だということも、またある意味真実であろう。そして、その衝突に身も心もすり減らし、周囲のことにまで目が行かず、そしてそのまま人生を終えてしまうこともありえるだろう。しかし、これは忙しいから、とても余裕がないからといって、目を向けなくてもいいということではない。

その一方で、バラバラだった国々が統合の動きを見せているところもある。いい例が、EUだ。現実、欧州ではEU加盟が進み、今年ついには25カ国の大欧州圏が登場した。これは歴史において悲願だった欧州統合の実現、かつてはオイローパと言われた汎ヨーロッパ思想への意向を示しているとも考えられるが、この巨大なEU圏では、カネ・人・モノ（もちろんそれに伴う情報という価値も含め）の動きが遥かにスムーズになり、通貨も統合されていく過程にある。また旧共産圏としていわゆる西側と対立していた国々も加盟したことで、一気に経済も巨大・強大になり、政治的にも経済的にも大きな存在となっている。鉄のカーテン、イデオロギーのぶつかりあいの時代を経てこのように大きな圏ができ

あがってきつつあり、欧州においては「フランス人」「ドイツ人」「エストニア人」「イタリア人」が消え、皆が「ヨーロッパ人」になっていくかもしれない。

現にこのEUのような例もあるが、実際には世界の現状は融合というには非常に程遠いレベルにある。もちろん過去からの歴史に依って、紛争が避けられない状況も存在することは事実であるが、この紛争に関してはこのように興味深い見方がある。

ハーバードのサミュエル・ハンチントン教授は1993年に「文明は衝突するか」という論文をフォーリン・アフェアーズに発表し、イスラム文明が欧米文明に対して戦争を仕掛けてくるという予測を展開した。(その後この論文は『文明の衝突』という本になった。)

大規模テロ事件でハンチントンの予測は当たり、さすがハーバードの学者は鋭い、と賞賛されたが、真珠湾攻撃以来「敵」を作り続けることで国際主義の政策を維持してきたハーバードの流儀を考えると、ハンチントンの論文は「分析書」ではなく、思いつきの「企画書」と呼んだ方がいいものだ。オサマ・ビンラディンを新しい「敵」として仕立て、国際主義の流れを維持するための企画書である。<sup>1</sup>

この「紛争」というものについて、ハンチントン教授はその著書『文明の衝突』の中で、次のように述べている。

冷戦後の多極的、多文明の世界には、冷戦時に存在したような決定的な分裂は存在しない。しかし、イスラム教徒の人口増大とアジアの経済的発展はつづき、西欧とこれに挑戦する文明とのあいだの紛争は、他の種類の分裂よりも、グローバル・ポリテイクスにかかわる問題の中心になるだろう。イスラム教徒の政府は、西欧にたいしてより非友好的になりそうだし、イスラム集団を西欧社会とのあいだに、繰り返し小競りあいがつづき、ときには激しい暴力をともなった紛争が起こるだろう。<sup>2</sup>

なぜ、このような論説が登場するのであろうか。なぜ、宗教の違いが「暴力をともなった紛争」<sup>3</sup>とされてしまうのだろうか。その原因としてはいろいろ挙げられるだろうが、ここでは人類共存と文化・文明というキーワードに絞って考察してみたい。

まず文明と文化について伊東俊太郎氏は、文明とは「智徳の進歩」<sup>4</sup>であり、「物質」<sup>5</sup>

であり、文化とは「内在的な精神的価値を問題にする」<sup>6</sup> のものであり、「精神」<sup>7</sup> である、と定義している。さらにそれを時間軸で見た場合、「文化と文明は本質的に連続したものであり、文明は文化の特別発達した高度の拡大された形態である」<sup>8</sup> とされ、文化と文明は切り離されるものではなく、連続した形態であることが容易に理解される記述となっている。

また文化と一口にいても非常に大きな存在であるが、文化はその民族、言語、宗教などを包括した上に成立しているものであり、これらの要素がそれぞれの文化差を生み出しているともいえる。更にその文化が連続拡大し、文明を形成しているのである。が、それゆえ、この差異が衝突の原因になり、融合へとなかなか移行できない理由にもなっているのはおそらく誰の目から見ても明らかであろう。特に宗教観の違いは、過去の歴史を紐解き現実に宗教戦争の勃発を経験したことから鑑みても、大きな衝突を生む原因にもなっていたことは明らかであり現代でもその状況は変わっていない。またそれぞれの宗教に対して知識のなさから生じる無意識的な行動、また理解のなさから、個人間レベルの争いから国家間、民族間の争いにも発展していることもある。

更に、過去の栄光にしがみついたままの誤解もあるだろう。現実に今でも、例えば日本において周囲で見受けられるのは、東南アジア諸国に対する相変わらずの意識の低さ、アジア諸国の中では日本がダントツに進んでいて、他の国々はまだまだインフラも整っていない、といったような誤解である。確かに日本がリードしている部分が全くないとはいえないが、しかし、現在に至ってさえ、「電気は走っているの？」などという質問を NIES 諸国出身者に投げかけるのは、余りにも無知、そして理解がなさすぎると言えるだろう。

が、なぜこんなことが起きるのか？ということを見ると、これは人間心理の根底にひそむ比較意識からやってくるのではないだろうか。人間はついつい比較をしがちな生き物なのだろう。そこから何が生まれるのかといえば、比較することによって自分達（もしくは自分達の文化、国家、所有物などあらゆる存在において）よりも、いわば低いレベルのものを探し出すことで優越感を感じ、そして安心感を抱く、逆に自分達よりも高いレベルのものを見つけた場合は劣等感を抱きがちだが、この劣等感を押し隠すため、もしくはまやかしの如く見えないようにするために、何かしら優越感を感じられるものを探し出そうとする傾向にあるのではないか。

そうやって考えると、文化という項目をとってみても、“比較文化”という言葉が存在するように、比較をすることで優劣をつけるということを無意識的に（あるいは意識的に）

行っているのではないだろうか。もしそういう意識が根底にあるとすれば、これはもう到底、融合という発想には至らず、ただただ対立していくだけであろう。が、現実にはこういった考え方が、生活の中には浸透しているのではないだろうか。経済学でも比較優位、絶対優位という概念が存在している。これは優劣をつけるというより、少しでも“有利”な方を選択するという考え方が、理解が薄かったり馴染みがなかったりすると、どうしても優劣をつけるという感覚に陥ってしまいがちであり、またそれを無意識に行っているところがあるのは改めて自己を振り返ってみないとわからないことなのかもしれない。

更に中世キリスト教的世界観からすると、いわゆるキリスト教国西欧が“正しい”のであり、それに対する存在としてアラビア諸国が描かれてきた。いい例が十字軍である。日本の世界史の教科書においても、明言はされていなくても十字軍が正しく、アラビア諸国（イスラム教圏）が悪者のような描き方をされていたことを記憶している方は少なくあるまい。これを如実に示したのが、9・11テロがあったときのブッシュ大統領の演説ではないだろうか。“Crusade”という単語を使用して、大きな反感を買ったのは記憶に新しいところである。<sup>9</sup> ならば、そこには全くアラビア世界に対する憧れが欧州人には全くなかったかといえ、それもあたってはいないだろう。例えば、アラビアへの憧れ、またアラビア世界からの影響といえ、音楽においてもモーツァルトの『後宮からの誘拐』にも見受けられる影響、その他の芸術においてもトルコへの憧れも伺われ、トルココーヒーがいまだに欧州のカフェに残っていることを見ると、憧れがあったにも関わらず、後世の人間、特に第一次大戦で傷ついた欧州人の矜持を保つためなのか、歴史観が故意に操作されてきたのではないだろうか、と思われる部分もある。この点については、西洋支配から生じた記述であり、それによって世界を支配しようとしてきた列強および列強国出身者の恣意的記述となっていることを裏付けるように、

それは第一次大戦後のヨーロッパの不安を予知するがごとく、まずシュペンゲラーにより“西洋の没落”として提示された。ここではエジプト、バビロニア、インド、中国、ギリシア・ローマ、アラビア、メキシコ、西欧の八つの高度文化が認められ、このそれぞれの文化は歴史における一個の独自の有機体と捉えられ、それ自身の誕生と成長と衰亡と死をもつとされる。<sup>10</sup>

と伊東氏も論じており、欧州の危機感、またそれが伺われる世界観を世界史として広めていったことが垣間見える記述もある。

このように、憧れは劣等感への裏返しにもなり、またそれが反感となって表に出てくることも現実には多々ありえる。そして、いくら技術や科学が進んでも、人間のこのような比較意識や感情は今も昔も変わらないというのが現実ではないだろうか。

が、このままでは、結局何も変わらない。ずっとその気持ちを抱いたまま、衝突や雑言を繰り返すだけで、人間としては何も進化せず、何も進歩しないであろう。このレベルを脱却し、融合という方向に向かっていくには人間の意識の向上が求められるべきである。

では、それにはどうしたらいいのか？次は、そういう疑問が持ち上がってくるだろう。これに対しては、日本人は非常に大きな潜在能力を秘めていると私は考えている。

日本人は、古来より調和・融合文化を体現してきた民族であろう。歴史を振り返ってみても、まず漢字を中国から輸入したこと、そこから始まり今の日本では漢字、ひらがな、カタカナが普通に使用されていることから見ても、自然体でうまく調和や融合を図ってきた民族といえる1つの例ではないかと思う。それ以外の部分、例えば食生活も上手に日本のなかで調和や融合されてきた例であろう。カレーライスなどを始めとして和・洋・中をうまく組み合わせ、融合という文化体系が非常に進んでいることが手に取るように理解できる。こうやって今の日本人の生活を見てみると、無意識のうちに上手に外来のものを取り込み融合させ、日々の生活で浸透しているものは多いのではないだろうか。

また別の例を挙げてみよう。シューベルト作曲の『野ばら』は日本でもよく知られている名曲である。原作詞はあのゲーテであり、当然ドイツ語の音節にあわせた曲展開になっている。が、これが近藤朔風訳の日本語訳で歌うと、非常に座りが悪い。私も子供のころは意識もせず、「なんとなく節と言葉が合ってなくて、意味がよくわからないなあ。」くらいの感覚だったが、ドイツリートとして学習した時にはあまりの違いの大きな衝撃を受けた。しかし、それでも依然としてこの曲は多くの日本人に親しまれ、また日本語でも歌われる。それを受けいれるだけの受容性があるとも考えられるし、例え異質なものであったとしても違和感をそれほど覚えないうちに、自然に生活に取り込んでいけるということなのかもしれない。それゆえ融合性という点で見れば、日本人は意識しないうちにそれを自然に体得し実践している民族とも言えるかもしれない。教会を見ても、一般信者向けにはミサ曲、賛美歌などでも日本語訳されたものを使用している。原語とは少々ずれている、もしくはかなり省略された訳詞もあるが、それが違和感なく受け入れられ、信仰には欠か

せないものとなっているところを見ると、言語そのものが大切なのではなくその意味するところ、メッセージ性や意図が伝わるように機能することが一番大切なのだという印象も受ける。こう鑑みると、その転換プロセスを経て、日本人は外来のものも受容し自分の中で消化し同化していき、その意図するところやメッセージを受け取るという一番必要な部分だけはきちんとこなしている非常に素晴らしい民族であり、能力の持ち主であるということも言えるような気がする。

とすれば、我々日本人は本来、比較よりも調和・融合を得意としている、しかもそれを意識する・しないに関わらず、上手に取り込んでいる民族だといえると思われる。しかし、これは日本人だけの特性ではないだろう。皆、同じ人間としてこの世に生を受けたものであれば、日本人が出来て他の人々、他民族に出来ないことはないはずである。であれば、日本人が得意とするこの分野においてリーダーシップを取りながら、世界の他の地域・文化圏にこの考え方を広めていくというのは1つの方策ではないだろうか。文化は比較するものではなく、全てを人類の知恵に基づいた調和や融合であると考えられるはずであり、またその考え方を広めていくことも可能だと思われる。

もちろん、物事はそれほど単純なことではないだろうし、更なる検証と研鑽が必要であろう。が、少なくとも21世紀になり、少しではあるが人類が融合していく兆しが見えていないわけではない。確かにまだまだ世界中を見れば、紛争や戦争が絶えないし、問題は一気に解決のつく事柄ではない。それだからこそ、世界の中で我々の使命は、徐々にその示唆される方向、人類が求められる方向、調和や融合の方向へ向かっていく努力を惜しまず、また日々それに向かつての構築を行うことであろう。そして、その動きが世界に広がっていけば、その先には融合文化という意識が大きく広がり、人類の共存に貢献できるのではないだろうか。

かつて私がアメリカ留学していた時、大きな衝撃を受けた出来事があった。1992年、私が留学期間を終えて帰国することになった時、各国から集まっていた留学生仲間が皆でフェアウェルパーティを開いてくれた。アメリカ生活にも慣れて帰国するのが寂しいと思う反面、やはり日本に帰るのは嬉しい気持ちも抱いていた私は、ある留学生の言葉にはっとさせられた。彼は旧ユーゴスラビアからの留学生だったが、ポツンと私に語った。「マサコは帰る国があつていいね。僕にはもう帰る母国がない。」彼のこの搾り出すような思いを聞いた時、私は言葉を失った。彼は続けた。「兄を頼ってアメリカに来たけれど、出国した時以上に戦況が激しくなって、もう母もどこにいるかわからないんだ。」と。1992年

たとえば、旧ソ連を皮切りに東欧共産圏が次々と崩壊、彼の母国も歴史の荒波に翻弄されていた頃である。世界が大きく動いていたにも関わらず、それまでは平和な環境を享受し日本で暮らしていた私には何もかもが遠い世界の話だった。が、アメリカ留学で突然現実の厳しさや辛さを見せられることとなった。しかし既に当時、彼の地では、宗教や文化の対立が多く貴重な人命を奪っていたのであった。また日本にいた頃は、私自身母国、祖国という言葉にこれほど重みを感じたことはなかったが、この時日本を出たことで、初めて帰る場所があるという幸福を身に染みて感じた。

国籍、その所在地、出生地、親・肉親の居住地、そういったもろもろの存在が母国であるというのも確かに1つの考え方であろう。また文化や文明の違いが存在し、人間がそれぞれ異なった存在でいられることも、これまた真実であろう。しかし、最終的には世界はこの世に生を受けたものにとっては、どの地も母国であるべきではないだろうか。それが全人類の共存ということではないだろうか。

全人類が共存できる社会、世界が誰にとっても母国であるような社会にしていくこと、そしてあの時悲しい表情を浮かべた彼のように、これ以上多くの人が苦しむことのない世界を構築していくことが21世紀における我々の今後の使命でもあろう。



## 註

- 
- 1 田中宇 大門小百合 『ハーバードで語られる世界戦略』 光文社新書 2001. p.236
  - 2 サミュエル・ハンチントン(鈴木主税訳) 『文明の衝突』 集英社 1998. p.362
  - 3 同上
  - 4 伊東俊太郎 『比較文明』 東京大学出版会 1986. p.2
  - 5 同上 p.8
  - 6 同上 p.7
  - 7 同上 p.8
  - 8 同上 p.13
  - 9 ウェブサイト：[www.jibjab.com](http://www.jibjab.com)
  - 10 伊東俊太郎 『比較文明』 東京大学出版会 1986. p.33

## 参考文献

- 伊東俊太郎 『比較文明』 東京大学出版会 1986.
- 伊東俊太郎編 『比較文明学を学ぶ人のために』 世界思想社 1997.
- トマス・インモース(尾崎賢治編訳) 『変わらざる民族』 南窓社 1972.
- 上田邦義 『日英2ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』 勉誠社 1998.
- ノーム・チョムスキー(山崎淳訳)『9.11 アメリカに報復する資格はない!』文春文庫 2002.
- ジョゼフ・S・ナイ・ジュニア(田中明彦・村田晃嗣訳)『国際紛争 理論と歴史 原書第4版』有斐閣 2003.
- ルコント・ドゥ・ヌイ(渡部昇一訳)『人間の運命』三笠書房 1994.
- サミュエル・ハンチントン(鈴木主税訳)『文明の衝突』集英社 1998.
- J.レッドフィールド(山川紘矢・亜希子訳)『聖なる予言』角川文庫 1979.
- Chomsky, Noam *9-11*, Seven Stories Press, 2001.
- Huntington, Samuel P. *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Touchstone Books, 1997.

Nye, Joseph S. Jr. *Understanding International Conflicts – An Introduction to Theory and History (Fourth Edition)*, Longman, 2003

Orwell, George *Animal Farm*, Penguin Books, 1951

Orwell, George *Nineteen Eighty-four*, Penguin Books, 1954.

Redfield, James *The Celestine Prophecy*, Warner Books, 1993.

参考ウェブサイト

[www.jibjab.com](http://www.jibjab.com)